

博士論文 要約

近世庶民の世界観—「異人」観を中心に—

東北大学大学院文学研究科

文化科学専攻 日本思想史専攻分野

ポロヴニコヴァ・エレナ

【目次】

凡例

序論

一、問題提起—本研究を構成する三つのキーワード / 二、先行研究史—近世庶民思想の研究の現状— / 三、本論文で使用する資料 / 四、研究課題—近世の「異人」観— / 五、研究方法 / 六、論文の構成

第一部 「日本」と「世界」

第一章 庶民の認識における「日本」と「世界」—節用集の日本図を中心に—

はじめに / 一、近世節用集における日本図 / 二、「日本」国の見方 / 三、「日本」国の境界 / 四、「日本」国外の描写 / おわりに

第二章 近世庶民の「世界」像—節用集の世界図を中心に—

はじめに / 一、近世節用集における世界図 / 二、「世界」観の変容 / 二—一、「世界」全体に対する認識 / 二—二、「世界」の諸地域に対する認識 / 三、伝説上の国・地域の描写 / おわりに

第三章 大雑書に表現される「世界」観—「須弥山図」と「地底鯨之図」を中心に—

はじめに / 一、大雑書における仏教系世界観—「須弥山図」を中心に— / 二、大雑書の「地底鯨之図」に表現される世界観 / 二—一、日本国を取りまく生物 / 二—二、要石と鹿島 / 二—三、「ゑぞ」 / おわりに

第四章 大地に対する認識

はじめに / 一、地球説の流布 / 二、須弥山説と地球説 / 三、地動説の流布 / 四、地球説・地動説に対する庶民の反応 / おわりに

小括

第二部 様々な異人像

第五章 「異人」としての天皇

はじめに / 一、永代節用集の年代記 / 二、節用集の年代記に表現される天皇観 / 二一、
「異人」としての天皇 / 二二、天皇と将軍 / 二三、理想王・悪王 / 二四、側近の陰謀 / 二五、
天皇に対する庶民の期待・信頼 / おわりに

第六章 外国人・異国人の「世界」

はじめに / 一、節用集における人物図 / 二、人物図に描かれる「異人世界」 / 二一、
「日本」国に対する認識 / 二二、「旧世界」に対する認識 / 二三、「新世界」に対する認識 / 三、
異人に対する認識 / おわりに

第七章 関守としての大蛇

はじめに / 一、三途の川に棲む大蛇 / 二、火山噴火としての大蛇 / 三、領域を
取り巻く大蛇 / おわりに

小括

第三部 重複する世界観

第八章 「異界」の構成—『異界双六』を中心に—

はじめに / 一、岩城紀子による『異界双六』の構成 / 二、『異界双六』の構成 / 三、
「異界」に対する認識—善と悪の両義性— / おわりに

第九章 「この世」と「あの世」の重複

はじめに / 一、異国＝地獄という認識をめぐって / 一一、ブラジル人＝鬼 / 一二、
夜国＝無間地獄 / 一三、漂流記に見られる「世界」観 / 二、極楽浄土は
どこに認識されていたのか / おわりに

小括

第四部 「人間」とは何か

第十章 食人と民間治療

はじめに / 一、「みいら」という薬 / 二、薬としての人体の一部 / 三、「薬用食
人」の背後思想 / おわりに

第十一章 「人間」と「非人間」

はじめに / 一、「人間」「非人間」という観念 / 二、「非人間」的な異人 / 三、「人
間」としての日本人 / 四、「人間」と「非人間」の認識上の境界 / おわりに

小括

結論

総括 / 今後の展望

図表一覧

文献一覧

参考資料 / 参考文献

初出一覧

あとがき

【要約】

序論

本論文は、「異人」観を中心にして、近世庶民の世界観を解明することを目的としたものである。

ある時代の思想は権力者・知識人・一般庶民など、様々な階層の世界観からなる。しかし、思想史では、荻生徂徠や本居宣長などの知識人の個人思想を研究対象とすることが多い。他方、庶民の思想・世界観—特に泰平の中で生きている庶民の世界観—の解明はいまだに大きな課題として残されているのである。

ここでいう「庶民」とは一般の人々であり、知識の面では「知識人」と対になるものである。誰が「知識人」なのか、誰が「庶民」なのかを規定する時、それぞれの持っていた教養・知識を考慮に入れる必要がある。その際は、社会に出回っていた書籍が何で書かれていたのか、という点が一つの手がかりになると考えられる。

筆者の考えでは、「庶民」とは主として漢字仮名交じり和文で書かれてルビのある本や仮名で書かれた本を読める者であり、「知識人」とはそれ以外の教養レベルのある者である。また、「知識人」はある程度はっきりしたシステムとしての思想・世界観を持つ者である。そして、そのシステムとしての思想はある意味で客観的である。他方、「庶民」の世界観は多くの場合、主観的なレベルを超えていないものである。「知識人」の思想は論理的で、「庶民」の思想は直感的であることが多い。

従来の思想史研究は知識人の個人思想に関するものであり、その中の近世思想は儒学思想が主流である。また、従来の研究では知識人の思想を解明することによって、それを近世人全体の思想と論じる傾向がある。例えば、若尾政希の諸論考（『「太平記読み」の時代—近世政治思想史の構想—』、「思想史という方法—歴史と主体形成—」『歴史学研究』第九一四号、「書物・メディアと社会」『シリーズ日本人と宗教—近世から近代へ—』第五巻な

ど)である。

若尾政希は諸論考において、知識人だけでなく、上層庶民をも視野に入れ、「近世人の思想形成」について考察し、領主層から庶民までの「広範な人々に、同じ書物（版本でも写本でも）が読まれることによって、身分や地域の相違を越えた社会の共通の認識＝社会通念・常識が形成された」という。

しかし、全ての近世人が同様な認識・世界観を持っていたのかは疑問である。近世日本の社会を構成していた人たちはその知識や教養が違っており、それぞれの入手できていた情報も読める書物も異なっていたのであり、そのため、皆が同様な世界観・思想を持っていたとは断言できないのではないかと考えられる。

近世庶民の思想を論じる研究は全くないわけではない。しかし、先行研究はいずれも、近世人の一部（知識人・庶民出自の思想家など）、庶民の一部（上層庶民・民衆宗教者・漂流民など）の世界観を論じているものであるが、近世に生きていた一般庶民の世界観に関する研究は十分ではないと言わざるを得ない。

そこで、先行研究を踏まえながらも、本論文が目指すところは一般庶民の世界観を全面的に解明することである。その際、資料として用いるのは、近世庶民がしばしば接触していた資料である。それは、庶民の間で広く流布した書物（節用集・大雑書など）や絵地図、庶民の娯楽にもなった双六、庶民向けに絵解きされた曼荼羅などである。このような諸資料は近世庶民の思想形成に多大な影響を与え、庶民の世界観を豊かにさせたものであり、それがために貴重な資料である。

本論文の最大の課題は、近世庶民の「異人」観である。「異人」という概念は、人類学・民俗学・社会学・歴史学などの様々な研究分野で用いられるものであり、「自己」でないものを指すのである。「異人」研究は、折口信夫の「まれびと」論や柳田國男の『山の人生』、岡正雄の「異人その他—古代経済史研究序説草案の控へ—」から始まり、現代にいたるまで、様々な分野の研究者によってなされている（山口昌男『文化と両義性』、黒田日出男「御伽草子の絵画コード論—挿絵の世界をも読むために—」『御伽草子—物語・思想・絵画—』、小松和彦「異人論—「異人」から「他者」へ—」『岩波講座現代社会学』、同著『異人論—民俗社会の心性—』、赤坂憲雄『異人論序説』、山泰幸・小松和彦編『異人論とは何か—ストレンジャーの時代を生きる—』など）。

以上のような先行研究でなされている「異人」分類は十分だとは言えないため、本論文では、「異人」を次のように規定した。一般庶民から見た「異人」は、①自分の村・町の住

人でないもの＝漂泊者・賤民など、②庶民でないもの＝支配者・権力者、③日本人でないもの＝外国人・異国人、④人間でないもの＝超人間的な存在であるカミ、という四つに大別した。

それぞれの「異人」イメージは、独立したものではなく、様々な形で重複するものである。ただし、「異人」を「カミ（妖怪）」として論じている小松和彦や、「異人」の本性を「鬼（カミ）」にあるとする黒田日出男などの先行研究と違って、筆者は「異人」を「カミ」より広い概念と規定する。このような「異人」概念をもって、世界観全体を解明できると考えられる。

近世庶民の「異人」観は本論文の最大の課題であるが、具体的に言えば、本論文では（ア）「日本」や「世界」に対する認識、（イ）大地（宇宙）に対する認識、（ウ）天皇などの支配者に対する認識、（エ）外国人・異国人に対する認識、（オ）カミに対する認識、（カ）異界に対する認識、（キ）「人間」「非人間」をめぐる認識、（ク）様々な境界（「日本」国と異国・外国との間、「この世」と「あの世」との間、「人間」と「非人間」との間など）をめぐる認識、というように、空間認識・自他認識・異界観・人間観などを課題とした。

本論文において、「近世」という時代は、近世中期（一六八八～一七八〇）と後期（一七八一～一八六八）を中心に論じた。なぜならば、近世中期・後期は、元禄（一六八八～一七〇四）年間を皮切りに庶民文化が最も栄えた時期だからである。また、本論文において資料として用いる節用集や大雑書などの書物も多種多様になり、庶民世界観の形成が大いに促されたのもこの時期である。

前述した諸課題を考察するにあたって、資料の博搜と精緻な分析、その比較という研究方法をとった。前述したように、本論文で扱う資料は文献資料と図像資料である。図像資料の解読・分析を積極的に行うことこそ、本論文の重要な方法である。

いずれの時代もその前後の時代なしでは成り立たないものであるため、「近世」を論じる際、それ以前とそれ以降の時代にも注目する必要がある。近世という時代の庶民世界観は近世以前（主に中世）のものを受け継いでおり、それを展開してはじめて「近世」世界観になる。また、それはそれ以降（近現代）の時代に受け継がれていくのである。それ故、近世の諸資料の比較にとどまらず、近世という時代の庶民世界観をよりよく把握するために、それ以前（主に中世）やそれ以降（主に近代）の時代の資料との比較をも行った。そうすることによって、はじめて「近世」の世界観の独自性が浮かび上がってくると考えられる。

さらに、近世庶民の世界観の特質などを解明するために、日本以外のものとの対比を試みた。近年の思想史研究では、東アジアに着目して日本思想を描き出そうとする傾向があるが、日本庶民の世界観は世界各地の民族の世界観と類似する点が少なくなく、それぞれの文化における世界観が基本的に共通するものだと考えられる。それ故、近世日本の庶民世界観を解明する際、「東アジア」だけでなく、その枠を越えて広い意味での「世界」を視野に入れる必要がある。そこで、本論文では、国際比較によって見えてくる共通点・類似点を把握した上で、日本の世界観を解明していった。

本篇及び結論

本論文は四部からなる。

第一部では、近世庶民の間で広く流布した節用集や大雑書を資料にし、近世庶民の空間認識を考察した。第一章では、節用集の日本図に表現される認識を解明した。「日本」国がどのように認識されていたのか、またその周辺の「世界」（異国・異域）がどのようなものであったのか、を検討した。第二章では、同じく世界図を資料とし、「世界」に対する認識を考察した。その際、「世界」全体に対する認識、あるいは「世界」の各地域に対する認識だけでなく、「世界」での「日本」の位置がどのように認識されていたのかも明らかにした。第三章では、大雑書における「須弥山図」と「地底鯰之図」の分析を通して、そこに表現される世界観を検討した。さらに、第四章では、大雑書と節用集に描かれている大地に対する認識を考察した。このようにして、近世庶民の持っていた、「日本」国に対する見方、地理的な広がりとしての「世界」や宇宙的な広がりとしての「世界」に対する見方などの空間認識を解明できたのである。

第一部で論じる、「日本」をも含む広義の「世界」の所々には様々な「異人」が住んでいる。そこで第二部では、近世庶民の抱いていた「異人」像について論じた。まず、第五章では「異人」としての天皇に着目し、支配者・権力者に対する認識を検討した。その際、節用集に挿入される年代記を資料として用いた。第六章では、節用集の人物図に表現される「異人」なる外国人・異国人に対する認識を解明した。そして、第七章では「異人」なるカミの一例として、大蛇像—その関守としての性格に着目しながら—を考察した。

第三部は、多様な形で重複する世界観という、近世庶民の思想の特徴の一つに焦点をあてた。まず第八章では、『異界双六』に表現される、様々な異人の住処である「世界」—「異界」と言い換えても良い—の構成に着目し、それぞれの異界像・それぞれの異人像の重複

について考察した。続けて、第九章では人界（「この世」）と異界（「あの世」）の重複を検討した。その重複とは、「異人」の「世界」は地獄のようなものであり、「日本」は極楽浄土のようなものだ、という対照的な認識に基づいているものである。

第四部では、「日本」と「世界」、「日本」人と「異人」の対比に基づく庶民の世界観をよりよく理解できるため、「人間」と「非人間」という対照的な観念を取り上げた。まず第十章では、庶民の間で流布した民間治療法に着目し、日本人の間で日常的に行われた「薬用食人」について考察した。その際、「異人」の特徴の一つである食人と日本人の「薬用食人」との認識上の違いを解明した。そして、第十一章では「人間」と「非人間」に対する認識を明らかにしながら、「非人間」としての「異人」像がどのように成り立つのか、を検討した。

結論では、これらをまとめ、「異人」観を中心に考察した近世庶民の世界観の特性を整理し、そこから見えてくる「近世」という時代の特性について展望を含めて総括的に述べた。

近世に生きていた人たちは皆、同様な世界観を持っていたわけではない。それぞれの教養・知識レベルが異なっており、接触できる情報も異なっていたからである。そこで、一般庶民—仮名・漢字仮名交じり和文で書かれる書物しか読めない者たち—の世界観を解明するには、知識人等の資料ではなく、庶民向けの資料を検討する必要がある。そのような資料とは、仮名や漢字仮名交じり文で書かれて多種多様な挿絵のある書物や双六や曼荼羅などである。それらと接触することによって、一般庶民は独自の世界観を作り上げたのである。

ここで改めて留意したいのは、庶民向けの書物等にあるのは、幕府当局や一部の知識人の間でしか流布していなかった精度の高い情報ではないため、庶民の世界観も知識人のそれと異なるものであった。それ故、従来の思想史でほとんど研究対象にされなかった庶民思想の解明は重要な課題であり、本研究の意義はそこにある。

近世庶民の世界観は全体的に見れば、「中世的」なものから「近代的」なものへ次第に展開していった。第一部で考察してきた節用集や大雑書に挿入される地図類を例にして見れば、それらを、中世的な図（行基図・地底鯰に取り囲まれた形の図・仏教系世界観に基づいた須弥山図など）、近世に新しく展開してきた図（東北地方が北に立ち上がる形の図・マテオ・リッチ系の卵形図）、より科学的な—近代的と言い換えても良い—図（測量を考慮に入れて作成された地図・両半球図）、という三つのグループに分けられる。しかし、それぞれは入れ替わったものではなく、同時に近世庶民の間で流布していた。幕末においても、

また近代になっても、庶民の間では古来知られた様々な伝説等に基づいた情報が共有されており、科学的な知識が広まっても、それに対する近世庶民の理解は未だ乏しく、また独自の受容がなされていたのである。

このように見ると、「近世」という時代は「中世」から「近代」への過渡期として捉えることができる。近世の世界観は、中世世界観を構成する諸要素を基礎としながらも、新たな知識をもってそれらを展開してはじめて近世的になる。そして、このような近世的な世界観は近代の世界観の基盤を形成していくものである。それ故、いずれの時代に対しても言えることではあるが、「近世」という時代の思想は、その前後の時代から切り離して検討すれば、解明できないものである。

近世庶民の世界観は概して言えば、空間（地理）・時間（歴史）に対する認識や日常生活（宗教・道徳・人間関係など）に対する認識である。このような総合的な認識である世界観は自他認識に基づくものと言える。人間は常に、「自己」と「他者」を意識しているからである。例えば、空間認識とえば、「自己」の住む環境（自家・自国など）に対しては「他者」の住む環境（他家・他国など）がある。時間認識では、歴史における「自己」と「他者」の対照が見られ、宗教の面でも「自己」と「他者」（カミなど）との相互関係が中心にある。「自己」に対する認識は「他者」認識なしで成り立たないものであり、またその逆のことも事実である。

このように考えると、世界観・自他認識は「異人」概念をもって明らかにすることができるのである。そこで、本論文の主題は近世庶民の「異人」観とした。

広い意味での「世界」には、「自己」なる日本人庶民だけでなく、様々な他者＝「異人」もいるのである。それぞれの「異人」及びそれらの住む「世界」（「異界」）に対する認識は、様々な形で重複する。支配者や権力者はカミのように思われ、地獄の支配者である閻魔王とイメージが重なることもあった。漂泊者や旅人などはどこからともなくやって来る神と認識され、境界の向こう側に住む妖怪などと思われていた。外国人や異国人も、海の彼方から来るカミ（善と悪の両方）などと意識されていた。「異人」像はダブルイメージで成り立つものであり、このような多重性は庶民世界観の最大の特色なのである。

ただし、先行研究で指摘される「異人」の本性がカミだというのは、近世の「異人」像を簡略化してしまうのである。確かに、様々な異人イメージは古来、カミとダブルするのであるが、近世では、「異人＝カミ」という枠を超えたような「異人」観が発達してきたと考えられる。近世においては「異人」を単なる超越的な存在一理解を超えた存在と言い換

えてもいい—として見るのではなく、「異人」を理解しようとする動向が次第に現れてきたのである。

庶民の世界観は、「異人＝非人間」「日本人庶民＝人間」という対比した認識に基づくものである。このような「人間」と「非人間」の対照は人間界（「この世」）と異界（「あの世」）の重複で表現されることがある。「日本」国の「外」にある「世界」は地獄の鬼の住処と重複して認識されていた。それとは対照的に、特に近世後期・幕末になると、「日本」国が極楽浄土のような場所だという認識が現れてきた。「外」に広がる「世界」は危険で恐るべきものであるが、「内」なる「日本」国は安全で安心できるところだ、という認識である。

泰平の時代である近世においてこそ、このような対照的な認識が際立つのである。「内」なる世界の安全・安心を脅かすと見なされるものは直ちに「非人間」とされ、排除される。それは、近世以前の時代にも見られる現象であるが、近世では一層著しくなる。中世においては、「異人」を聖なるものとして一例えば、障害者などの「〈不具〉性を神と人間との媒介者の資格とみなす信仰」があったという（赤坂憲雄『異人論序説』）一見ることがあるが、近世においては天皇やカミなどのわずかな例を除けば、そのような動向がほとんど見えなくなる。近世の「異人」は多くの場合、恐るべきものであり、排除すべきものである。

他方、近世においては「異人」への理解が始まり、従来の「異人＝非人間」認識が次第に変わっていった。理解プロセスは、「非人間」→「人間に似たようなもの」→「人間」というように展開していくのである。本論文で明らかにしたように、近世においては「非人間」としての「異人」から「人間に似たようなもの」としての「異人」への変化が見られるようになる。当然のことに、近世においても「非人間」の「異人」イメージが全くなかったわけではない。しかし、「人間に似たようなもの」という観念が成立したことは注目すべきことであり、この点も近世世界観の特色である。

庶民の世界観は、同心円的な構成を持つものである。中心にあるのは言うまでもなく、日本人庶民であり、「日本」国である。その外なる円は、様々な他者・「異人」の「世界」である。中心から「世界」の果てへ、「人間」から「非人間」へ、というように同心円が広がるのである。

その時代に流布する知識によっては、新たな同心円が加わることになる。節用集の日本図や世界図の分析で明らかになったように、近世の「世界」とは、単なる「日本→異人世界」ではなく、「日本」→不可思議な「異人」（羅刹国・雁道・金銀の島など）の世界→従来の「異人」世界（三国世界観を構成した中国・天竺及び朝鮮）→中国などの伝説に基づ

いた「異人」世界（『山海経』等に出てくる手長国・足長国など）→五大陸まで拡大してきた「異人」世界→ヨーロッパなどの伝説に基づく「異人」世界（世界の果てに位置づけられる小人・長人など）、というように広がっていく。また、前述した「異人」に対する理解が始まれば、「人間」と「非人間」の間では「人間に似たようなもの」の円が現れてくるのである。

本論文では近世庶民の世界観—「異人」観を中心に—について考察を行ったが、いくつかの点で課題が残っている。

まずは、「異人」のうち、旅人・漂泊者などに対する認識についてほとんど論じることができなかった。また、藩主・将軍等に対する認識などに関しては見通しを示しただけである。このような「異人」に対する認識を全面的に解明することは、今後の課題である。

また、本論文では同じ庶民の中でも、異なる認識を持っている者がいたと述べた。それは漂流民である。漂流民は「世界を見てしまった」者であるため、その世界観も当然、実際の「世界」を見たことのない庶民と異なるものである。漂流民の認識はどのように変わっていったのか、「日本」国を出たことのない庶民の認識とはどのように違ってきたのかは、具体的に検討する必要がある。

他方、庶民と知識人の世界観の相違に関する考察は不十分である。両者の認識の仕方に関しては事例を増やししながら、緻密に解明していかなければならない。

もう一つの大きな課題は、「動物の思想」である。動物も広義の「異人」であると言うまでもない。従来、単なるカミやカミの使いとして論じられてきた動物は、そのような規定に包摂されない多様な性格を持つものである。これは本論文で検討した鯰や大蛇のイメージからでも窺われる。その点の分析と、多様な動物観を生み出し支え続けた近世固有の思想的・文化的土壌の解明が今後の課題である。

本論文では比較という方法を積極的に取り入れた。それは近世とその前後の時代との比較だけではなく、日本の世界観と世界各地のそれとの比較でもある。日本人庶民の抱いていた世界観・「異人」観と、世界各地に見られる認識との間では多くの共通点がある。それは国際的な比較を行って始めて見えてくるのである。

同心円的な「世界」構成、「素朴な君主主義」という支配者・権力者に対する認識、地獄界や極楽（天国）界の構造、「非人間」的な「異人」の排除メカニズム、ダブル・スタンダード（二重規範）に基づく「世界」像などなど、良い意味でも悪い意味でも、世界各地では時期を同じくして類似したような認識が成立してきた。人間の世界観とはある程度、普

遍的なのである。「日本」だけを見ても、あるいは近年の研究で取り上げられていた「東アジア」だけを見ても、思想・世界観の動向を把握することができないと考えられる。本論文ではそれについて触れておいたが、広いコンテキストにおける近世庶民の世界観の解明は今後の主要な課題である。

このような諸課題を念頭において考えれば、本論文はかかる目論見の第一歩である。一つひとつの課題を解明していけば、豊かな想像力に満ちた庶民の思想とその独自性が浮かび上がってくると考えられる。